

# 淫らなお姉さんの童貞教育 ～犯された淫穴～

直輝／NAOKI

## 第一章

「初めての精通はいつあったの？」

「十二歳くらいのときです」

「それは夢精だったの？」

「いいえ……」

「じゃあ、オナニーね」

「……」

「恥ずかしがらなくていいのよ。オナニーを経験しない男の子はいないの。皆していることよ。あ

なたに恋人ができて、性の欲求を恋人と分かち合う時が来るまでの勉強みたいなものなの」

「でも、僕の場合、すぐに我慢できなくなるんです。すぐに……オチンチンが硬くなっちゃって……」

「中学三年生くらいなら皆そうなの。あなたくらいの若い男の子の精巣では毎日休むことなく

新しい精子が毎日作られているの。特に十代が一番、精液を作る時期なのよ。だから、すぐにたまっちゃって、たまって来ると男の子は精子を外に出そうとするため、下半身がムズムズして誰でも出したくなるの。これは身体の自然の欲求よ。それが女の子の身体への関心やセックスへの関心が強くなり、自然にオナニーを覚えていくの。こんな事をして良いのかなんて罪悪感に陥る必要なんてないのよ」

「でも、そんなに何回もするのは異常じゃないですか？」

「あなた、一日何回オナニーするの？」

「多いときは十回くらい……」

「ははは、確かに多いわね。でも、心配要らないわ。そんな子はいっぱいいるから。したければ何回でもすれば良いのよ。将来その為に問題が起きる事はないから。ムズムズするのに射精を我慢するほうがよくないの。したくなったらオナニーをして、精子を出してやるほうが、身体のためにもいいことなの。でも、疲れて勉強に影響のないようにしてね」

思春期カウンセラーの高島彩乃はそう言って、少年の性の悩みの相談電話を切った。

「ふう～」

「お疲れ」

元同僚の看護婦であり、今も同じ事務所で働いている八島美雪が冷たい麦茶を入れてくれた。

「さっきの子、一日十回もしてるって？ もう、一日中オチンチン握ってるのね」

「そんなふうには言わないの。本人は真剣なんだから。あなたのほうはどんな電話だったの？ ずい

ぶんと長かったけど.....」

「母親とのセックスがやめられないんだって」

「ヘビーねえ.....でも、ほんとに、盛りのついた男の子はとんでもないことがあるから注意

したほうがいいわ」

「彩乃んとこの健史くんは大丈夫かな？」

「あら、あの子は大丈夫よ」

「どうして？ 思春期真っ盛りの高校生でしょ？ ナイスバディな女の色気に惑わされてるん

じゃないの？」

そう言って、美雪は彩乃に擦り寄っていった。

「健史くんって、もちろんしてるよね？」

「そりゃあ.....してるでしょ.....してないほうがおかしいわよ.....」

「精液の付いたティッシュとか、残骸とか見つけたことある？」

「まさか！」

「たまに健史くんの部屋のゴミ箱とか覗いてみたら？ 面白いもの見つかるかもよ」

「いやだわ.....」

「だって小学生でもしてる子いるんだから」

「小学生って.....そうよね.....」

「ほら、私、小児科にいたでしょ。何度もそんな場面見てきたもん。入院してきた小学生が、ガマンできなくて、自分でしちゃった跡がゴミ箱に残ってたりするのよ」

「ああ、そう……」

「そうよ、中学生や高校生になるともっと大変なんだから」

「大変って？」

「足を骨折なんかしちゃったら自分でトイレ行けないでしょ。だからトイレ介護が必要なの。おしっこするとき、シビンで受けてあげるだけなんだけど。その時に大きくなっちゃうのよね。」

「ええ？　ほんと？」

「別に珍しい事じゃないわよ。だって怪我してるのは足だけなんだから。他は全部元気なの」

そう言って、美雪は彩乃に顔を近づけた。

「私ね、手伝っちゃったことあるの」

「手伝うって？」

「だから、手伝うの、小さくするのを」

「ほんと？　小児科って、そんなことまでするの？」

「まさか！　私の場合はサービスよ。でもね、可愛いだよ、童貞の男の子って。チョット手伝ってあげるだけで、顔真っ赤にしてスグに……」

「そッ、そうなの？」

「だって、女の人の裸も直に見たことないし、触ったことも触られたこともなくて、想像だけ逞

しくて、自分でしてる訳でしょ？　それが、看護婦さんにしてもらうんだもん。まして、あの年頃って毎日どんどん袋の中で作ってるから、あっという間に溜まっちゃうでしょ？　ものの一分も持たないの。本当にスグなのよ」

「そんなにスグ.....なの？」

「そう。それに、イク時の顔がとってもかわいいの」

二人しかいない部屋なのに、美雪は周囲を気にしながら小声で言った。

「あなたも、下着とか気をつけたほうがいいわよ。若い子はすぐにそういうのおかずにしたがるから」

「やだわ、美雪ったら.....」

彩は席を立てトイレに行った。便座にすわり、パンティを脱いだ。股間の性器の当たっていた部分がべっとりと濡れていた。

(ああ.....また汚しちゃった.....)

この仕事をするようになってから、よく濡れるようになった。電話の向こうにいる、まだ女を知らないチェリーボーイの秘め事を聞いているうちにいつしか興奮するようになってしまった。ひとり妄想に耽り、まだ女に挿入したことのない若い猛々しいペニスを激しく扱く中学生や高校生の姿を想像して、自分を慰めてしまうこともあった。

(健史くんも.....毎日してるんだろうな.....)

そう思いながら彩乃は放尿した。

## 第二章

授業が終わるや否や、伊藤健史は教室を飛び出した。校舎の裏の自転車置き場で自分の自転車に跨り、一目散に自宅へと走らせた。

六月に入ってから、健史の家に親戚の彩乃がやってきて、二人で住んでいた。父が海外転勤となり、健史の両親がアメリカに行ったので、一年間、彩乃と住むことになったのだ。

親戚といっても、彩乃は母の妹である叔母の旦那の妹。健史と直接血の繋がりはない。しかし、叔母と一緒に住んでいた彩乃を健史は良く知っていた。そして、健史は以前から彩乃に好意を寄せていたのだ。

健史の家は、学校から自転車で十分ほどのところにある高層マンションの十二階。

マンションの駐輪場に自転車をおき、エレベーターで上がった健史は、通路の中ほどにあるインターフォンを鳴らした。

誰の返事も返ってこない。

再度鳴らしてみるが、何の応答もない。

「あれ？ 彩乃さん、今日はまだ帰っていないのかなあ」

炎天下でなくても、外付けになっているマンションの通路は、吹き付ける熱風で立っているだけでも全身から汗が噴き出るほど暑かった。

人気のない通路で、健史はにじみ出てくる額の汗を拭いつつ、ドアノブへ手をかけた。鍵はかかっていた。

鍵を開けて中に入ると、エアコンをつけた。

健史は玄関の中に入った。汗が引くほどの冷気に、一瞬のうちに包み込まれた。上がり口にはパンプスが2足あるだけで、室内は依然、人の気配を感じさせないぐらいシーンとしていた。

健史は奥の自分の部屋へ向かった。廊下を挟んで両側にある扉の前を通り過ぎようとした時、バスルームの扉が開いていた。

健史は脱衣室の扉を開けた。

バスルームのドアは閉まっていたが、シャワーのしぶきが脱衣室まで弾け飛んでいた。

「また、扉をきちんと閉めないでシャワーを浴びたんだな」

そう言って、雑巾を手にして、健史は脱衣所に足を踏み入れた。

「あっ」

次の瞬間、健史は、脱ぎ捨てられた服を見て仰天し、息を呑んだ。

それは彩乃がいつもきている黒のスカートと白いブラウスだった。

彩乃の美しい姿態を思い出すなり、健史の心は妖しいときめきにたちまち支配された。

短めのスカートを履いて綺麗な脚を曝け出していた美しいその姿。タイトな T シャツに身を包み込んだ身体、深く括れたウエストライン、熟れきった肉感豊かな腰つき。

歩を進めるたびに、シュッシュツと、太腿あたりでストッキング生地のをすれ合う悩ましい音をさせながら、プリンプルンと揺れる彩乃のお尻。そのタイトの上からくっきりと浮かびあがった豊かな実りを包んでいるパンティライン。服の下に潜む彩乃のすべてが健史の淫らな性欲の対象となった。

(はあ、彩乃さん)

脛の裏に焼きついた上品にして官能的な姿態を思い出すだけで、全身が異常に火照ってきた。唾液の分泌が激しくなり、学生ズボンがきつく感じられるほど股間への血流が増した。

耐えがたく衝き上げてくる胸のざわめきを抑えつつ、ランドリーボックスを隠すように上に置かれていたスカートをそっとどかしてみる。

「あっ」

心臓をつかみ取られるほどドキッとし、瞬時にして極度の緊張感と昂奮に見舞われた。

ライトグレーのパンストと一緒に、白いブラジャーとパンティが潜んでいた。

思わぬ下着の存在に、健史のペニスは一気に硬くなった。胸の鼓動は耳に聞こえるまでに鳴り響き、理性も思考力も急激にわけが分からなくなり、どうしようもない状況に追い込まれていった。



彩乃が外から帰ってきやしないかと気が気でなかったが、込み上げてくる欲望に矢も楯もた  
まらなくなった健史は、ついに震える手をパンティに伸ばした。

「彩乃さん……」

触れたとたん、切ない声を洩らした。

ざわめく動悸は激しくなり、クラクラする濃密な昂揚に意識もさらわれそうになりながらも、  
絹のようなすべすべした手触りだけはしっかり認識した。

彩乃の豊満なヒップと、健史にとってはいまだ未知のものである女性器を包み込んでいた  
パンティを、ランドリーボックスからつまみあげた。

目の前に広げられたパンティはとくに飾り気のない型であった。おもむろにパンティのウエスト  
をサイドにグッと広げた。

(こんな小さな布切れに……ほんとに、彩乃さんのお尻とあそこが……)

健史はますますたまらなくなる。

欲望に衝き動かされるままパンティを頬に近づけると、脱ぎたての汗臭さと混じって、フェロモ  
ンがたっぷり詰まった熟女の牝臭が鼻孔を刺激した。

わずかに残っていた理性をも壊されそうな激情がたちまち沸き起こり、欲望を貪るままに顔  
を彩乃のパンティに埋めた。

「あ、彩乃さん、ボ、ボクッ……」

その瞬間、我慢の限界を越えた。

健史は身を震わせながら彩乃のパンティを顔に押し当てた。

「ああ……」

せわしく学生ズボンをブリーフごと膝まで引き降ろすと、野太いウイナーのようなペニスが飛び出てきた。

ペニスは下腹に貼りつくほどギンギンに反り返り、亀頭もすでにヌレヌレ状態だった。

その場にひざまついて、硬直しきったペニスを握りしめた。

(す、すごい……)

彩乃への熱い感情の発露なのか、肉茎は健史自身でもびっくりするぐらい硬く、コチコチに強ばっていた。

瞼を閉じ、ゆっくりと男根を握った手の上下運動を開始した。

彩乃の切れ長の瞳、肉厚の唇、誇らしげに見せつける濃艶な胸、ふくよかなヒップ、彩乃の悩ましいまでのスーツ姿が、くっきりと脳裏に映像を結んだ。

(彩乃さんのような人に、男にしてもらえたら……)

童貞の妄想を膨らませると、いきり立ったペニスの中で快樂のマグマが急激にグツグツとひしめき合ってきた。

あと数回しごきあげれば、確実に噴火してしまうところまできた。

「ボ、ボク、彩乃さんが、彩乃さんがあ〜」

とっさに肉茎から手を離し、荒げる呼吸を整えた。束縛から解放された肉棒は快感に耐え

ているようにピクピクと痙攣していた。

たまらぬ思いで、彩乃の白いパンティを高々とそり返っているペニスに被せた。

「ああ〜っ」

敏感な亀頭がクロッチの裏地に柔らかく包まれるや、大きく跳ねあがり、全身がブルブルツとした。

パンティの上から絡みつけるように肉棒を握った。獣のような息継ぎでしこった肉棒に大きなストロークを加えると、官能的で鮮烈な刺激に股間がズンズン疼いた。

すべすべしたポリエステル生地と肉柱の包皮とのこすれ具合がたまらない。

ペニスはけたたましく律動し、こらえにこらえていた快液が戸口に向かって一挙に押し寄せた。

目の前はピンク色に染まり、性感が高まって鼻息もいっそう荒々しくなっていた。

「あっ、あ、彩乃さん……」

最後ははっきりと彩乃のとびきり美しい姿態を脳裏に映し出しながら、何かにとり憑かれたかの勢いで、パンティの中ではち切れるほど怒張しきった肉棒を激しく扱きたてた。

「あ〜、彩乃さん、ボク、出る……。ああ、出るう！」

いつになく烈しい性感が脳髓を貫いた瞬間、健史は大きく天を仰いで、彩乃に向けられた欲望のすべてをパンティの中で爆発させた。

ドク、ドク、ドク……。

熱くて濃い新鮮なマグマが、彩乃の白いパンティを突き破るかの勢いで噴射した。あたかも彩乃の体内へ射精したかの快感が全身を駆け抜けた。

「くぅ〜っ……」

そのめまいを起こしそうな絶頂感、生々しい脈動が伴う射精感に、健史の身体は稲妻にでも打たれたように痙攣した。

股間の筋肉がキュッと収縮し、熱くて濃い精液が、穿き古したパンティを犯していた。

最後の一滴まで搾り取るようにしごいた手が止まったとき、全身からすべての力が解き放たれたように抜け、がっくりと肩を落とした。

顔が異常に熱くなり、耳鳴りがガンガンしていた。

床にひざまづいたまま、両手でパンティをそっと広げてみた。シルキーな光沢のポリエステル地の中に、生臭さが鼻につく黄色味がかかった精液が大量に溜まっていた。

オナペットと化した彩乃の下着に付着した自分の体液を、虚ろな目で見つめた。

精液まみれの牡肉はにぶく光り、萎えきらない形状で性感の余震にピクピクとひきつらせていた。尖端からはまだ出きらない白濁液が流れた。

「あ〜っ、彩乃さん……」

深い溜め息とともに切なく呟いた。

「また、やっちゃった……」

彩乃の下着によって、またもや強烈な快樂を味わってしまった。

まだ女性の肌すらも触れたことがないのに、まるで彩乃とセックスをしたかの充足感に満たされ、彩乃に対する思い入れをますます深くした。

ペニスの根元から肛門までの筋がジーンと痺れる感覚を残したまま、しばし身動きできなかった。異常なまでの昂奮は、完全に紅潮しきった顔と、額からしたたり落ちる大粒の汗が何よりも物語っていた。

(体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしく願いいたします。)